

## 『ピエール・ラヴダン著／土居義岳訳 パリ都市計画の歴史』

中央公論美術出版 二〇〇二年五月刊  
A4判 五七六頁 四五〇〇〇円(本体)

「都市」という言葉は、その意味するところを明確に定義されぬまま口にされることの多い言葉の一つであろう。だが個々の理解の差異をひとまずおきながらも、「都市」と呼ぶことを私たちにためらわせない、むしろ私たちの「都市」のイメージが常に囚われ、魅惑されてしまう特権的な都市が現実存在し、そのなかの一つにパリは確実に数え上げられる。この特権性こそが都市の通史という試みを可能にするのだとさえ思われるのだ。「形態のむこうに都市の魂を感じ」た画家たちのように、ラヴダンは「客観的な叙述」の裏に「都市の魂」を描きだす。

以下に本書の目次を掲げ、本書の中心となる第三部までの内容を紹介する。「序 資料と書誌のあらまし、第一部 ルテティアからパリへ—古代から十六世紀まで(三章)、第二部 古典主義の都市デザイン—十七世紀と十八世紀(五章)、第三部 市民社会・産業社会における都市改造—十九世紀と二十世紀はじめ(五章)、第四部 再開発から保全へ—第二次世

界大戦ののちの三〇年間(一章)」、そしてジャン・バステイエによる「追補 伝統回帰とあらたな都市革命—そののちの二〇年間(一章)」。

まず序では、歴史上の各時代におけるパリの地誌研究に参照されるべき資料を、発掘調査、都市図、絵画・写本画・版画、手稿・刊行物資料に分けて吟味する。主に土地とその利用、都市風景の復元といった都市計画的観点にかかわる資料の価値を重んじて批判が加えられており、これらにより読者はパリ都市史研究の見取り図をえることができる。

第一部では、考古学的な研究成果に則りながら、パリの地誌を辿っていく。パリ市発掘調査は十九世紀後半からのテオドール・ヴァケの先駆的業績と、一八九八年設立の古きパリ委員会の活動が基本的な資料となる。古代から現代までパリの都市平面がカルド／デクマヌスの刻印を留めているのが確認されよう。中世の都市計画においては、諸修道院領を核としたブル「集落」の形成、および行政による市壁の建設が中心的な話題となる。また王権にたいして市権力の輪郭が明確になり、高等法院とともに三者がパリの形成に主要な役割を果たしていくことになる。十六世紀のフランソワ一世による王権の強化は都市計画が総合的に構想されうる段階を予感させた。続く宗教内戦によりパリは荒廃するもの、給水所、照明、街路、植樹などの「美化」にかかわる、次代の「古典主義の都市計画」の理念が準備される。

第二部は、第一部、第三部が通史的な章立てであるのたいし、各章立てがテーマ別の構成をとる。「第一章 都市計画の推進者たち、第二章 パリの郊

外、第三章 地誌的な発展・新旧の発展・王像広場、第四章 都市の生活、第五章 十八世紀末のさまざまな都市図とプロジェクト」。

章構成から察せられるのは十七・十八世紀の都市計画の多様な相であろう。首都としての相貌を際立たせるパリの多様性を束ねるべく、王権による都市計画への介入は積極的に全体的な範囲に及ぶ。包括的な「真の都市計画」が成立した時代である。「美化」の様々な取り組みに加えて、中心に王の立像を据えた王像広場(現在のコンコルド広場等々)が「フランス的な」都市計画の独創として強調される。都市計画が過不足なく芸術たりえた幸福な時代といえるだろう。

第三部では、ナポレオンの壮大な構想と前後して、産業革命に伴う急激な成長に対応できないパリの姿が描き出される。パリ中心部と郊外地区、および右岸と左岸の不均衡が「パリの移動」として問題になり、七月王政期には大規模な公共事業の介入が要請され、それは第二帝政下オスマンによって遂げられることになる。数次の革命に彩られた十九世紀の一般史にたいして、常に伏在する実体として都市を捉えようとするラヴダンの都市史観が鮮明に表れているのが第三部であろう。それは「連続性」と「全体性」の希求であり、第一部第一章の末文「都市形成の歴史は一本の糸でつながっている」という確信的な言葉と響き合う本書の通奏低音でもある。

最後に、綻ぶところのない訳者の堅実な訳業に敬意を表したい。この浩瀚な書物が、様々な資料や図像の断片によって織り上げられる都市の迷宮に彷徨う者の、導きの糸となることを願いたい。(戸田稷)